

ISSN 0910-2396

野鳥だより

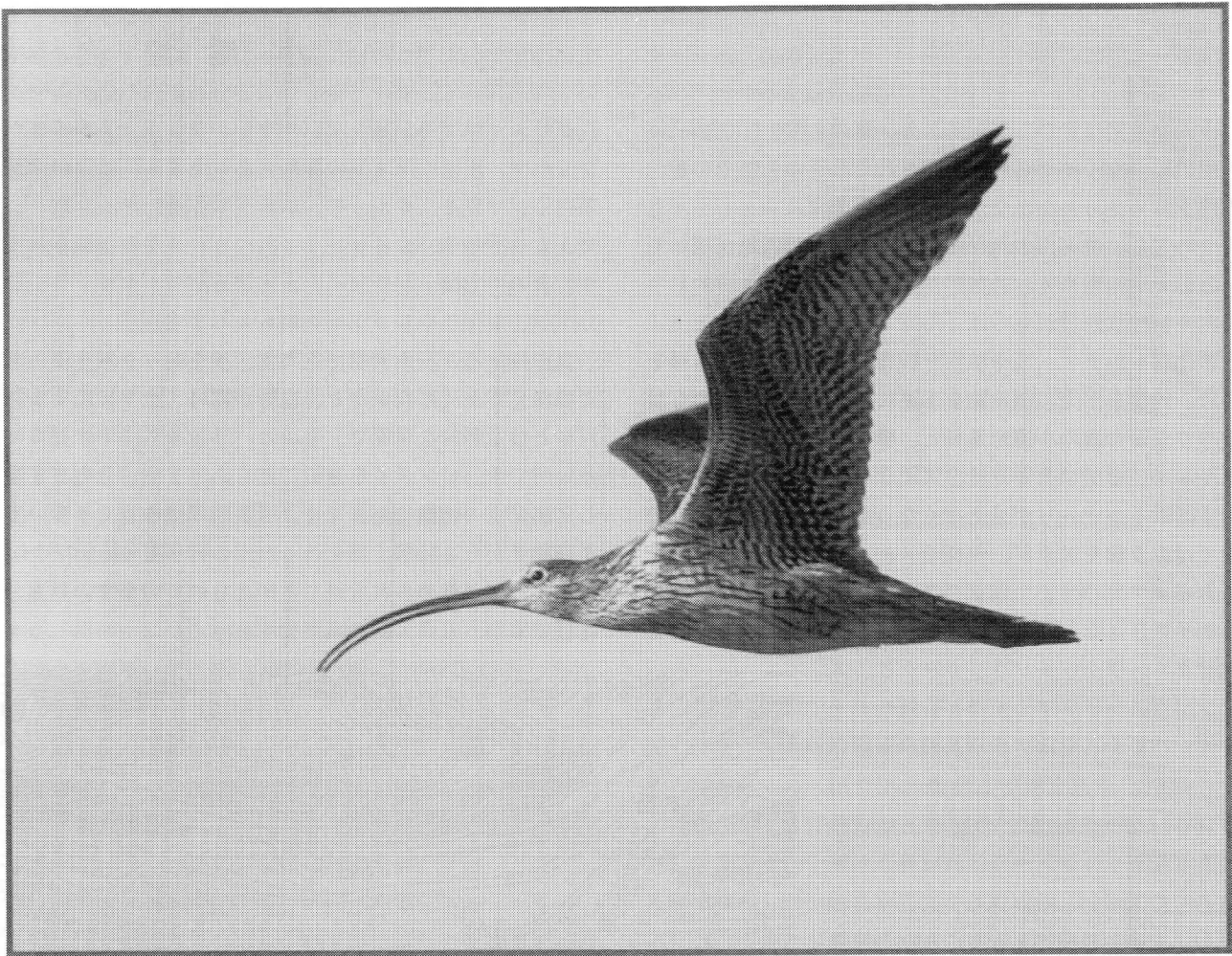
—北海道—

第 127 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成14年3月21日

ホウロクシギ



2001. 9. 30 石狩市八幡 撮影者 高橋良直

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6丁目8-1



も く じ

私の探鳥地 (42) 十五島公園	小堀 煌治	2
室蘭近郊の野鳥たち (自然愛好グループ ヨシキリの会)	伴野 俊夫	3
北海道における繁殖期のスズメの分布	藤巻 裕蔵	8
南西オーストラリアのパスへの旅	木村 与吉	10
大館和広さんのコムケ湖シギ・チドリの講演から	広 報 部	12
小さなコアジサシ	岸谷美恵子	14
探鳥会ほうこく		14
鳥民だより		17
探鳥会あんない		18

私の探鳥地 (42) 十五島公園 (札幌市南区)

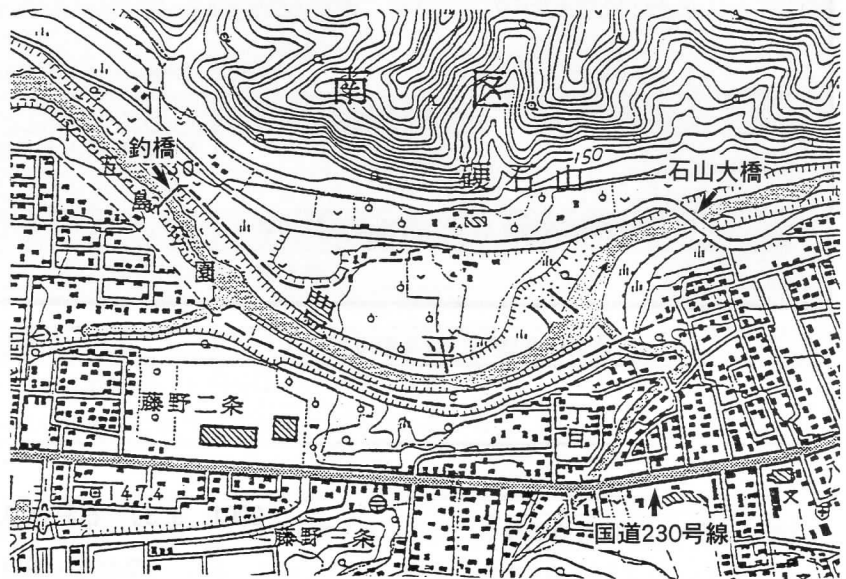
小堀 煌治

十五島公園は昔からジンギスカン鍋の名所として知られ、芝生に桜や梅が植えられ、整備された普通の公園ですが、周囲を良く見るとなかなか味のある所です。

この辺りは豊平川の河岸段丘がつくった傾斜地が続いているので宅地化を免れ、自然が残っています。地質的にも面白く、柱状節理が見られ、川原では二枚貝やアンモナイトの化石も出ます。鳥や植物を観察するなら公園の喧騒を避け、釣橋を出発し散策路を下流に向かいます。川にも目をやりながら森の小道を進むと、春にはハクセキレイ、キセキレイ、セグロセキレイ、アオサギ、イソシギが見られます。近年コチドリが見えなくなったのが残念です。森の中ではカラ類やアオジ、ヤブサメ、コルリ、オオルリ、キビタキ、アカハラ、クロツグミ、ヒヨドリ、メジロ、ニューナイスズメなど、早春にはルリビタキやコマドリも姿を見せます。フクジュソウ、カタクリ、ニリンソウ、シラネアオイなども観察できます。初夏から夏はアオバトの声も聞こえ、途中、小道を横切るオカバルシ川(白鳥園の裏の川)などの橋の上で立ち止まって下さい。運が良ければ巣立ち雛を連れたヤマセミやカワセミに会うことがあります。8月に入るとこんな上流部に毎年のようにセグロカモメやウミウが入ります。3年前の秋口の夕方、上空がにわか騒がしくなったので、何ごとだろうと見上げるとハクチョウの群れでした。この時期、ベニマシコやカシラダカが渡って行きます。夜間は向いの山からコノハズクの声が聞こえますし、オオコノハズクの声も聞いた人もいます。ママ

シグサ、ヤマブキシヨウマ、サラシナショウマ、ルイヨウショウマ、オオウバユリの群落もあります。冬は川の中が面白く、マガモ、カルガモ、ホオジロガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、カイツブリ、カワガラスなどが見られます。森の中ではミソサザイ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラやレンジャク類も入ります。

森を抜けると石山大橋に出ます。橋を渡り、無意根山を正面に見て上流に向かうと、視野が開け、土手に出ます。対岸とは対照的な草原で、春はヒバリ、モズ、ホオジロの多い所です。ビンズイを見ることもあります。そのまま進むと出発点の釣橋に戻ります。所要時間はゆっくり歩いて1時間半から2時間。橋を渡った所の野草園も見ものです。全道の野草が集められ所狭しと植えられています。以上、雑駁ですが十五島公園の概要です。



十五島公園周辺図

室蘭近郊の野鳥たち

伴 野 俊 夫 (自然愛好グループ ヨシキリの会)

1. はじめに

室蘭近郊には断崖が続く半島や河川、湖沼、森林などの自然環境があります。これらの地域で四季折々に見られる野鳥たちの様子的一端をご紹介します。

2. 室蘭近郊探鳥地の概要

(1) 発電所前海岸《豊浦》

早春の海岸で越冬するコクガンの群が見られます。

(2) 有珠湾・善光寺境内《洞爺》

有珠湾ではオオハクチョウ、キンクロハジロ、スズガモが越冬します。春、秋にはキアシシギの群れもやって来ます。善光寺は自然林と公園の樹木があり、カラ類、アカゲラが年中見られ、夏にはアオバト、オオジシギ、メジロ、ムシクイ類、オオルリなどが見られます。

(3) 長流川《伊達紋別》

中流の農業ダム付近では年中ヤマセミを観察でき、オジロワシ、オオワシが越冬します。河口付近には、ハヤブサのつがいが生息していて、狩の様子を見ることができます。冬、長流川は、ほとんど凍結しないため、オオハクチョウ、ホオジロガモなどが越冬します。春秋には、シギ、チドリが少数ですが立ち寄り、この付近で唯一、いろんなシギ、チドリが見られます。

(4) アヤメ水車川・シャミチセ川《伊達紋別》

アヤメ水車川は町中に残された自然林があり、カラ類など夏鳥の繁殖が見られます。シャミチセ川は人工的な川ですが、川の中にヨシが茂り、夏はオオヨシキリが繁殖し、冬はカルガモ、マガモ、コガモを中心に200羽程越冬します。

(5) チマイベツ川《室蘭》

室蘭で最も自然に近い川で、サケが溯上し、カワセミが行き交い、アオサギも舞い降ります。開けた田畑や牧場はオオタカの狩り場で、オオジシギも繁殖しています。海岸ではハヤブサ、コクガンも見られます。

(6) 測量山・地球岬《室蘭》

測量山や地球岬などの室蘭の半島は渡りの中継地で、春秋にはたくさんの野鳥が見られます。測量山には唐松平一女測量山ーマスイチに至る数本の散策路があり、森林浴がてらに散策するとオオルリやキビタキ、クロツグミが見られます。9月中旬のハチクマから始まるタカの渡りは全国に知られ、大勢のバードウォッチャーが集まります。1987、1991年の2度イヌワシも見られました。

地球岬から海原を展望すると地球が丸く見えます。地球岬散策路の春はカタクリやエゾエンゴサクの敷き詰めたよ

うな群落の中を野鳥のさえずりが満ちあふれます。

室蘭の半島には世界有数の高い密度でハヤブサが住んでいます。海上にはアカエリヒレアシシギやミズナギドリの大群があらわれます。

(7) 水元水源地・林道《室蘭》

室蘭では珍しくオシドリやカワセミの見られる探鳥地として人気があります。室蘭岳に続く林道は森と溪流の鳥たちが迎えてくれます。

(8) 亀田記念公園《登別》

四季を通じて山林の野鳥が見られ、アカゲラがドラミングしたり、桜の開花時にはオオルリやキビタキ、イカルなどの色鮮やかな野鳥がみられます。

(9) 幌別川《登別》

街中で野鳥などの自然とふれ合える身近な場所であり、道央から道南を北限とするオオヨシキリやカワセミ、ノビタキなどが繁殖します。秋の渡り期にはホオジロやカシラダカ、ベニマシコなどが群れて休息しています。冬はオオハクチョウと共にカイツブリやマガモ、コガモ、ホオジロガモなどでにぎわいます。

(10) 富浦・フンベ山・アヨロ海岸《登別》

断崖はハヤブサが繁殖し、オオワシやオジロワシの見張り場です。冬の岩礁ではシノリガモやクロガモ、ウミウなどが越冬します。

(11) 地獄谷・橘湖の林道《登別》

クロツグミやアカハラなどの森林の鳥が朝早くからさえずり、時にはクマガラも見かけます。

3. 室蘭近郊の野鳥の様子

(1) 測量山・地球岬地域の野鳥たち

① 秋の渡りのトップランナー

残暑が続く8月中旬から地球岬で標識調査をはじめました。標識調査は世界的に行われており、日本では環境省の委託事業として山階鳥類研究所が実施し、技量認定された資格者が野鳥に足環をつけています。足環には国名と番号が刻まれており、何時何処で付けられた物が記録されています。標識調査によって、渡りの経路や時期、寿命、生息数の推移などの実態を科学的に解明できます。足環を入手した方は山階鳥類研究所へ連絡して下さい。

生い茂った葉陰に渡りのトップランナーたちが潜んでいます。耳をすますと木立の上の方から「ピッ、ピッ」と金属的な高い声が聞こえてきました。エゾムシクイの地鳴きです。色合いはウグイスに似ていますが、やや茶色が強

い感じですが。春には「ツーチーキー」と特徴のある細い声でさえずっていました。

梢に群れる姿に目を凝らすと、明るいウグイス色の鳥も混ざっています。陽光に照らし出された頭の中央に、ソリが入ってます。センダイムシクイです。春にはいたるところの林で「焼酎一杯グイーッ」と鳴いていたものです。これらのムシクイたちはピンセットのように細いくちばしで、昆虫の幼虫などを巧みに捕えますが、どれも姿形が似ているので、種名を見分けるのが難しいものです。しかし、春はそれぞれが特徴あるさえずりなので、簡単に見分けられたものです。



センダイムシクイ

ヨシ原では、6月頃に大声で「ギョギョシ」と叫んでいたオオヨシキリが忍び足で渡り去りました。

灌木帯では青いコートに白いお腹のコルリが忍者のように足下をすり抜け、その後を茶褐色の子供たちが追いかけていきました。3年後には見事な青い衣装を着て成人に育った君たちに再会したいものです。

9月になると、メボソムシクイなどのセカンドランナーが登場し始めます。

② 鮮やかな衣装の人気者

春の花園で美しく着飾って軽快に歌うのは雄の成鳥だけです。婦人や子どもたちは自然の中で目立たない姿で歌うたいません。「法一、法華経」でお馴染みのウグイスもさえずる雄は見つけられますが、寄り添う雌は見つけれないものです。目立たないことが長生きの秘訣なのです。でも、雄は猛禽の襲撃も恐れず、危険を顧みずあえて目立つ衣装で花嫁を探します。見事に射止めた花嫁にはエンゲージリングとして、大事なエサをプレゼントするものもいます。

8月中旬のまだ残暑が残る中を秋の到来を感じて生い茂った草かげに集まって渡りはじめるものがあります。白いワイシャツに青いコートのコルリです。続いて、9月中旬になるとオオルリが渡りはじめます。秋の野山で、チルチ

ルミチルと呼びかけたくくなるようなみごとに青い鳥はめったに会えません。殆どは今年生まれのガキ大将ばかりで、肩や腰にチョットだけ青みがあるだけです。

緑一面の林の中ではキビタキおじさんの黄色い喉や眉が一段と映えます。散策路の数歩先を飛んでは止まりながら先導してくれるキビタキに会うと、何か得した気分させられます。でも、今年生まれの子供はまだ全身が褐色で母親と同じ姿です。母と子の違いは尾羽の形や頭骨の発達度だけなので、野外で区別できません。

赤色の鳥は少ないものですが、喉の紅色が引き立つノゴマの大群が9月末の夜空を渡っています。雌なのに喉が薄いピンク色のハーフも混ざっています。10月中旬にはサルに似た顔のベニマシコが草原を埋め尽くし、11月には紅色のオオマシコやピンクのよだれかけをつけたウソが渡っていきます。

野鳥が色とりどりの見事な姿になるまでに3年位もかかるものがあります。ルリビタキのオレンジとブルーの鮮やかな衣装などは長生きの証なのです。

③ 張りのある明るい歌声

9月になるとモズの甲高い高鳴きが秋を告げます。モズはタカのように、かぎ型に曲がったくちばしで、サングラスをかけたような威圧感のある顔つきです。昆虫だけでなく、小鳥も襲うギャングです。灌木などの上の方に止まって、いつも尾羽をぐるぐる回しているのだから遠くからでも見分けられます。

モズの高鳴きが少なくなって、ノビタキが渡ってしまう9月下旬になると、クロツグミが渡り始めます。夜明け前の薄暗いうちから起きだして、「ブクブクブク」とつぶやいて騒ぎ始めます。春に見たクロツグミは見事な黄色いくちばしでしたが、秋の樹間に見え隠れしているものは、どれも黒っぽいくちばしで、翼に薄茶色の点々模様のあるものがたくさん見られます。この模様は生まれて間もない青年たちの衣装です。雌はさえずらないのでなかなか見つけられませんが、雄はこずえの目立つところで「キョピーキョピーキョピー」などと複雑にさえずります。張りのある明るい歌声なので、テレビのコマーシャルなどで使われています。調子にのると他の鳥の鳴きまねをして、クロツグミ弁のウグイスやオオルリの歌声に惑わされることもあります。

北海道の各地から集結したものが室蘭を旅立って噴火湾を飛び越え、さらに津軽海峡から日本海側をどんどん南下して行きます。これまでに、中国南端の海南島などで見つけたものもいます。地図もナビゲーターも見ないのに、このルートが東南アジアへ向かう近道であることが、どうしてわかるのでしょうか。クロツグミが渡り終える10月中旬以降にはひと回り大きいアカハラが渡り、続いて大陸からのシロハラが通過して行きます。大海原を行き来する行

動力に驚嘆させられます。来春の5月にふたたび戻ってきたら、大好きなミミズを口いっぱい食べさせてあげたいものです。

④ やみ夜の支配者

9月の星座が瞬く地球岬の夜道を歩いていると、雑木の影からサッカーボール位に広げた羽をふわふわと舞うように羽ばたいて飛んでいました。フクロウの中で一番小さいコノハズクです。茶色と灰色のものがいて、どちらも真ん丸く黄色いクリクリ目玉がぬいぐるみの様です。全身が綿のようにやわらかい羽なので、羽音をたてずに獲物に近づけます。人のような平面の顔の両目を見開いて、暗闇の中でネズミなどの小動物を捕まえます。大きな目玉にとって昼は眩しすぎるのか、捕まえても寝てばかりいます。

糞は植物食の小鳥と違って人糞のように臭い匂いです。捕まえると糞を水鉄砲のように噴射するので掛けられないように気を使います。1999年に地球岬で標識をつけたものが2日後に松前町の白神岬で見つけれ、小鳥たちと同じコースを渡っていることが確認されました。

森林に入るとやや大形のオオコノハズクも見られます。目は橙色で大きな目玉なので、威圧感があります。さらに、1999年10月にはトラフズクが現れました。大きすぎてやっと片手に持って上中下の3枚に分けて撮影しました。また、暗闇にはヨタカが口を大きく開けて飛びまわります。まるで昆虫取りの網が飛んでいるようです。フクロウのように爪やくちばしで攻撃することがないので、捕まえるとゴアゴアと低い声だけで威嚇します。フクロウと同じように暗闇でも見える大きな赤い目は、明るくなると眩しそうで寝ていることが多いようです。この鳥はほとんど歩かないので足が退化してひ弱です。標識の足環を付ける時には骨折しないように気を使います。

10月末から11月には夜空の中をV字形の大群が声を掛け合いながら、ゆっくりと南下して行きます。思わず「また帰ってこいよ」と声援を送りたくなります。渡り鳥が飛び去る方向を間違わないように、目印となる星座が見える空を大切にしたいものです。

⑤ シジウカラも渡る

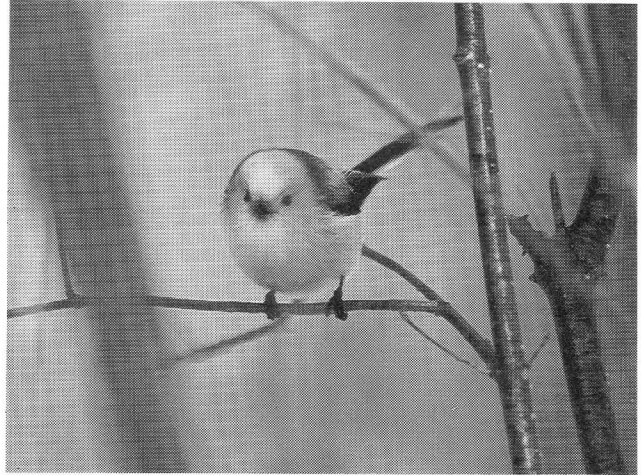
冬のエサ台にヒマワリの種を置くと、喜び勇んでシジウカラがやってきます。特に吹雪の翌朝は腹ぺこのようで、群れで訪れて夢中で食べて行きます。

冬の野山を散策すると、シジウカラの群れに出会うことがあります。群れの中にはハシブトガラ、エナガ、コゲラなどが一団になっています。この集団はどれも黒と灰色と白が主体で、似た色どうしの集まりです。赤や黄色の目立つものはいません。お互いに進む方向を知らせ合うように、ツイーツイーと声を掛け合いながら通過していきます。群れになると何か得になることがあるようです。誰かがエサを見つけると皆が分け前にありつけるとか、タカなどの

襲来を誰かが見つけると皆が逃げだせます。多くの仲間と群れになることは生きる知恵なのです。

これらのカラ類の殆どは留鳥です。しかし、10月中旬になるとシジウカラの大群が絵鞆半島から飛び出していきます。どこに行っているのでしょうか。

昨年、地球岬で標識の足環を着けたシジウカラが栃木県で回収されて、渡っていることが証明されました。シジウカラは仲がよいようで、前の年に2羽同時に捕まえた足環番号のものが翌年も揃って同時に捕まったことがあります。1年間カップルで一緒に行動していたのです。



エナガ (亜種シマエナガ)

寒さが身に凍みる11月にエナガの群れが行き交うことがあります。亜種シマエナガで北海道にだけ住んでいます。別亜種のエナガは本州以南に生息するものとされています。しかし、1999年の秋にその亜種エナガが捕まり、標識の足環をつけました。渡りをしないとされる亜種エナガが夏を過ごして南へ渡り去るところであったものと思われます。

室蘭市の鳥としてヒガラが指定されています。この鳥は9月末の数日の間に大群になって渡って行きます。地球岬で標識調査を始めた最初の1996年に標識の足環を付けたヒガラの数が、全国一に達しました。

⑥ 勇気ある幾つもの群れ

室蘭では絶滅危惧種のハヤブサが世界有数の高密度で繁殖しています。岬などの高台を見張り場として時速300kmの高速で野鳥を襲撃します。

10月下旬に、体の大きなヒヨドリのみごとな大群が鳴き声を交わしながら、岬の丘や谷の地形に沿って舐めるように移動して、幾つもの群れが海へ渡り出るタイミングをかって行き来します。ヒヨドリの群れが頭上を通過すると翼の風圧に囲まれて、思わず立ちすくんでしまいます。陸を離れて海に飛び出すには想像を絶する勇気が必要なのでしょうか。幾度も海へ飛び出しては戻ってきます。ようやく意を決して大群が対岸の駒ヶ岳を目指して海上に渡り出しました。すかさず2羽のハヤブサが連携して追いかけて

た。ヒヨドリは海水面すれすれまで飛行高度を下げ、時々海水に接触して飛沫を上げながら蛇行して逃げます。ハヤブサは海に突っ込む恐れがあるので襲撃できません。海岸から1 km程進んだところで低空飛行に疲れたのか反転して追直漁港に戻ってきました。殆どが今年生まれたばかりで、初めて海を渡るヒヨドリたちが、こんな逃げ方をどのようにして身に付けたのでしょうか。そんなヒヨドリを捕まえると連れ合いの仲間が心配そうに近づいて、放されるのを待ち受けています。体の大きい割に優しいのでしょうか。

ヒヨドリは視力がよいのかあまり捕まえられないので年に数羽しか標識の足環をつけられませんが、足環は本州中部以南に渡って回収されています。道内を出発したヒヨドリは居所を定めない風来坊なので、本州では畑の果物を荒らす嫌われ者です。時には、駆除されて回収されるのです。ハヤブサの襲来を回避して住み心地のよい暖地に行き着いた元気者にも受難が待ち受けているのです。

10月は渡りの最盛期です。日の出から2時間位の間、アオジやベニマシコ、カシラダカなどの大群が集中して通過します。渡りに適した風向きの良い日には移動する野鳥たちの群れが上空一面に溢れています。室蘭半島から渡る最も多い鳥はアオジのこどもたちです。10月初めはまだあどけない顔つきですが、10月下旬になると雄は口元が黒く引き締まって、男らしくなります。胸からお腹は黄色ですが、11月頃にはピンク色のものも現れて通称ピンジと呼んでやります。

11月上旬にアンカーのミソサザイが登場すると渡り終幕を迎えます。

⑦ いろいろ現れる珍客

地球岬での標識調査では毎年60種類を越える野鳥に足環を付けて放しています。60種類を越える放鳥実績は全国でも数少なく、誇るべき貴重な場所であることの証であると思われる。

標識調査を始めた1996年には北海道で3例目のカラフトムジセッカが現れました。識別ポイントが明確でないので、あらゆる角度から検討して慎重に種名を判断しました。

1999年には函館山と同時期に東北以北で初めてチョウセンメジロが現れました。普通のメジロの群れに混ざって訪れたもので、背中が一段と濃いウグイス色で艶やかに見えました。脇には識別ポイントの茶色い模様がありました。さらに、本州以南を分布域とする亜種エナガも出現しました。道内には亜種シマエナガしかいないものと思われていましたので、分布域の北上も暗示させる事態に興味をそそられています。

また、道央の高い山や道北以北で繁殖し、室蘭近郊で見かけない鳥も通過していることが明らかになりました。大雪山の針葉樹で繁殖するギンザンマシコが黒松の根元に現れ、さらにヤマヒバリやカヤクグリも現れました。どれも

めったにお目にかかれないものばかりです。2001年10月9日には道北で繁殖しているツメナガセキレイが出現しました。細身のスマートなセキレイで、異様に長く黒い爪が特徴でした。

南北を移動する多くの渡り鳥は室蘭の上空を通過しているようです。じっと目を凝らして見つめていれば、水泳のメドレーリレーのように、次々に種類を変えて通過します。春に種々の花が順番に咲いてくるように、南下する野鳥の種類は整然とした順序で毎年同じ時期に移動しているのです。

このような野鳥の標識調査に関心ある方の連絡をお待ちしています。

⑧ 次々に渡るワシタカ

室蘭で繁殖するハヤブサは世界有数の高い密度であると言われていています。6月頃には岩棚の雛が盛んに羽ばたきの練習をしています。ある日、巣立ったばかりの幼鳥が巣の真下の枝に必死でしがみついていた。私が近寄っても、親が餌を運んで来ても一歩も動けません。やがて、秋の渡りの到来とともに見張り場から飛び立つハヤブサが目立ちます。

9月下旬、どこから来たのか長い頸で一直線の前縁が特徴のハチクマが集まりだしました。旋回しながら舞い上がって、頂点まで昇ってから対岸の駒ヶ岳目がけて渡っていきます。すると、ニューナイスズメの一団も鳴きながら負けじと競うように昇って行きました。

10月下旬のヒヨドリの渡り期になると上空ではノスリたちが大きな鳥柱の頂点から渡ります。特に、上層気流の出る午前9時頃から多くなるようです。上昇気流の場所は風向きによって変わるようですが、マスイチは上空も海上も展望がよいので、多くのウオッチャーが集まります。オオタカ、ハイタカ、チュウビ、ミサゴなどが多い日はスズメ目の野鳥も沢山見られ、時にはクマゲラを見かけることもあります。さらに冬が近づくと、オオワシ、オジロワシなども見られます。

(2) 幌別川の野鳥たち

幌別川の春はヒバリの「チュルリ、ピチュリ、チュリ、チュリ」のさえずりで幕が開けます。まだ肌寒い4月初め、河口近くの小さな草地の上空に舞い上がったのは、縄張り宣言の雄です。ふだんは地上での行動が多く、よく歩くので丈夫な足の持ち主です。体の色はまだらな茶色で、周りの自然環境にマッチしてよく溶けこんでいます。

土手の低い木の枝に、小柄な黒と白の鳥が止まっています。胸のオレンジ色の日の丸がポイントのノビタキです。急に「ヒーヨーヒョロリ」と歌いながら、そわそわし出しました。ヒラヒラゆっくり飛びながら、意中の雌にアタックし始めたのです。めでたく雌を射止めたら、土手の斜面に巣を造ります。かつて、土手の巣が草刈りでむき出

しになって、生まれて間もないヒナが巣の中にいました。周りの草木で巣をカモフラージュしてあげると、それから10日目でヒナは全員巣立ちました。その後、土木現業所と話し合っ、草刈りの時期をヒナの巣立ち後にしてもらい、ノビタキ一家に平和が訪れました。

川面では翡翠色のカワセミが「ツイー」と鳴きながら矢のように飛んで、淀みの柳の枝に止まりました。すると、水中の魚をめがけて一気にダイビングして、頭から魚を丸のみした後、しゃっくりをしているように、何度もヒックヒックと頭を動かしていました。プロポーションは胴長短足ですが、群を抜いた美しさに、人気アイドルの座は不動です。

「ギョギョシ、ケケケ」幌別川のヨシ原からオオヨシキリのにぎやかな声が響きます。柳の木のとっぺんで、赤い口を大きく開け、灰褐色の背をちょこ丸めてさえずっています。5月10日ころから来始め、5、6月にはヨシ原の広がる各所で競い合うように歌が盛り上がります。ヨシの茎に碗型の巣を雌が造り、卵を抱き続けるのも雌が行います。ヒナへの給餌もほとんどが雌の仕事で、全くの母子家庭です。雄は気ままに新たな出会いを求めて、雌遍歴を重ねます。そして繁殖のシーズンの終わりには、妻子を残しサッサと姿を消してしまいます。鳥の世界にもドンファンで、不実な男はいたのです。

オオヨシキリ母子にはさらなる試練が待ち受けています。のどかなカッコウの声が聞こえるころには、幌別川の住人のオオヨシキリや、モズやアオジなどはちょっと気を引き締めます。他の鳥の巣に卵を生み落とし、自分の子だけが育つ托卵の習性を持つカッコウの出現です。4年前の6月、1羽のカッコウがオオヨシキリに追われていました。するともう1羽のカッコウが、留守になったヨシ原に入ってきました。恐らく親がいなくなった巣に托卵したのでしょう。オオヨシキリの母の受難は続くのです。

(3) 亀田記念公園の野鳥たち

桜が満開に咲き誇る亀田公園の館の庭にオオルリがいました。1mほどの高さを鮮やかな瑠璃色の雄鳥と地味な茶褐色の雌鳥が、つかず離れず飛び回ってラブコールに夢中で近寄っても逃げません。宴会場のカラオケも気にせず、ひたすら恋い焦がれて戯れています。

野鳥たちは枝先の新芽が大好きです。野鳥にもぎ取られた新芽が地面に散らばっていることもあります。芽吹いた木の側で待っていると黄緑色の小さな鳥が「チーチュル、ピーチュル」と何度も繰り返してにぎやかにむらがつて来ました。目の周りに白いリングのあるメジロたちです。メジロは散策路の桜にもむらがつて、顔中を花粉だらけにしています。

公園内の小川沿いを歩いていると、おなかの黄色いキセキレイが浮き沈みの上下動を繰り返しながら飛んできて石

の上にとまりました。虫をくわえて長い尾を上下に振っています。警戒している様子なのでその場を離れると、すぐに岩の隙間に入りました。

親鳥が巣から出ていくと餌を催促する雛の鳴き声が聞こえ始めました。再び虫をくわえて舞い戻った親鳥が短い警戒声を発すると、雛の鳴き声がピタッと止まりました。翌日、様子を見に行くとも巣立った後でした。近くの水辺で4羽の幼鳥が飛び回っていました。幼鳥は尾羽がやや短く、目立たない地味な色合いで外敵に見つかりにくい姿をしていました。

夜明け前の白み始めたばかりの暗がりに、明るく張りのある大きな歌声が響き渡ってきました。目立つ樹冠で白地



クロツグミ

に黒い点々模様の胸をピンと張って、黒いマントを着込んだクロツグミです。昨年の秋には灰色のクチバシだった子供たちが、鮮やかな黄色いクチバシで力強い姿の大人になっていました。まるで、亜熱帯の東南アジアで貯えた鋭気を一気に発散させて、恋人を探しているようです。この鳥の歌声はツグミの仲間で最も複雑です。

陽光がさし始めると、さまざまな野鳥のささやきが聞こえ始めました。まだ眠いのか、歯切れの悪い調子はずれの歌声が多いのですが、さらに1時間程過ぎて暖かくなると、チチロツイツイチョベチビーなどとヒバリのようなさえずりが聞こえてきました。ヒバリは草原の鳥だから森林にいるはずはありません。目を凝らすとスズメ位の鳥が樹上や空中で鳴いていました。胸の黒斑点と目の後方の白点模様が特徴のビンズイです。

背の高い広葉樹の7合目で、ハトとスズメの中間位の大きさのイカルが群れています。灰色の衣装の太く黄色いクチバシが目立ちます。雄も雌も同じ姿ですが、さえずっているのが雄です。明るく大きな声でピピョピーブピー、キコキキと鳴いている。まるで、「いいこと聞いた」と言っているようです。

(4) カルルス散策路の野鳥たち

カルルスの山間に、ひっそり静まる小さな湖：橋湖があります。カルルス・サンスポーツランドから湖までの林の中を歩くと、樹々の合間から「タララー、タララー」と、アカゲラのドラミングが聞こえてきます。新緑になったばかりのみずみずしい梢の上からは「チョコピー、チョコピー」と力強い声が降り注ぎます。目を凝らすと枝の上をチョロチョロ動き回っています。ほっそり小さいなウグイス色のセンダイムシクイです。大きさは12cm、雌雄同色。頭の真ん中にソリを入れ、他のムシクイの仲間からは一目置かれています。

目の前を黄色と黒の派手な鳥がゆっくりと飛んで行きました。スズメより小柄です。よく見ると眉も黄色、喉はくっきりオレンジです。明るい林が好きで、歌のテンポも軽やかに「ヒッ、ヒッ、ピッコロル」とさえずりだしたのはキビタキです。人が来ると驚いて、前へ前へと逃げて行きます。突き出た枝にしばしば止まるので、じっくり鑑賞させてくれます。近くに地味なオリーブ褐色の雌が現れまし

た。2匹の対照的な色合いの違いは、子育てする雌を外敵から目立たせない鳥たちの戦略なのです。

さらに奥に進むと、「ポポポ」竹筒をたたいたようなツツドリの声が聞こえてきました。姿はカッコウそっくりで、茂った林に生息します。この鳥もカッコウと同様、他の鳥に托卵するのです。ちなみに相手はセンダイムシクイです。

4. おわりに

身近に息づく地域の野鳥たちの様子を多くの人達とともに楽しみながら、生息に必要な環境を大切にしたいと思えます。

なお、探鳥地概要は「おもしろ野鳥ガイド」（野鳥の会 室蘭支部発行、筆者編集）を参考にしました。また、幌別川とカルルスの項は同書の伴野美江執筆より転載しました。

〒059-0015 登別市新川町4-1-28

(注) 写真は愛護会会員の撮影によるもので、カットとして挿入したものです。

北海道における繁殖期のスズメの分布

藤 卷 裕 蔵

本誌125号で北海道における繁殖期のニューナイスズメの分布について紹介した。スズメはニューナイスズメに比べると、人の生活との結びつきが強く、市街地から農耕地にかけて生息している。それに対し、ニューナイスズメは森林から農耕地にかけて生息している。今回は、この2種のスズメの生息環境がどのくらい違うのかに焦点をあてて、スズメの分布と生息環境について述べてみる。

スズメについて、環境ごと・標高ごとの生息状況についてまとめた。使用したデータはおもに自分の観察記録であるが、分布図を作成する場合にはこれまでに発表された論文や調査報告、日本野鳥の会の各支部の支部報（1970年代以降）からの記録も利用した。

分 布

図1は、約10km四方の区画を単位とした繁殖期のスズメの分布状況を示している。北海道北部、渡島半島、オホーツク海側では観察記録が少なく、空白の区画が多い。この図からは、石狩平野や十勝平野などの平野部のほか、平野部から山地にかけても分布しているのがわかる。スズメは、日高山脈や大雪山系の標高の高い所を除けば、農耕地や人家があると山間部でも生息しているので、このような分布になるわけである。そのため、10km四方を1区画としたこのような粗い分布図では、ニューナイスズメの分布とそれほど違っは見えない（本誌125号のニューナイスズメの分布図と比べていただきたい）。

生息環境

そこで、生息環境について具体的に検討してみたい。

調査したのは、686か所である。1か所に2kmの調査路を設け、4月下旬から7月上旬にかけて調べた。調査地の環境区分はこれまでと同じで、ハイマツ林、常緑針葉樹林（人工林も含む）、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林（観察路沿いの環境の20%以上が林地の場合）、農耕地、住宅地の8区分である。これらの環境・標高別に出現率（全調査地に対するスズメが観察された調査地の割合）を表1に示した。

スズメは、森林には生息しない。針広混交林と落葉広葉樹林でわずかに見られているが、これは調査路の近くに人家があったためである。ニューナイスズメが森林で11%～24%の出現率であったのに比べると、森林への依存のしかたは非常に異なっている。

その地の環境についてみると、スズメの出現率は農耕地・林では55%で、ニューナイスズメの59%とほぼ同じである。しかし、農耕地帯ではスズメの出現率が80%と高いのに対し、ニューナイスズメでは46%となかり低い。このように、同じ農耕地でも林のない環境では、スズメの出現率の方が高くなり、ニューナイスズメの方がより林への依存度が高いことがわかる。

住宅地では出現率は100%と高く、ニューナイスズメの13%との違いははっきりしている。この数値にもスズメの人とのかかわりの強さが示されている。山間部でも人家が

あるとスズメが生息するが、人が住まなくなり廃屋だけになると、スズメは見られなくなってしまう。しかし、スズメもやはり野鳥で、あまり建物が密集していると、生息数が少なくなる傾向がある。以前、帯広市の都心部から周辺の農業地帯にかけて鳥類の生息状況を調べたことがあるが、ビルの多い都心部では周辺の住宅地に比べて生息数が少なかった。

農耕地・林では2種の出現率がほぼ同じで、この環境にニュウナイスズメの出現率は森林の方で高くなり、スズメの出現率は農耕地や住宅地の方で高くなっていて、農耕地・林は両種の生態分布の中間帯といえるだろう。農耕地・林の調査路182か所のうち、66%では2種がともに、23%ではニュウナイスズメだけが、19%ではスズメだけが記録されており、22%では2種とも記録されなかった。

表1. スズメの生息環境別・標高別の出現率 (%)

生息環境	調査路数	標高 (m)					計
		-200	201-400	401-600	601-800	801-	
ハイマツ林	11	—	—	—	0	0	0
常緑針葉樹林	11	30	0	0	0	0	0
針広混合林	122	4	0	0	0	0	1
落葉広葉樹林	124	2	5	0	0	0	2
カラマツ人工林	24	0	0	0	—	—	0
農耕地・林	182	56	55	43	0	—	55
農耕地	188	80	82	50	—	—	80
住宅地	24	100	100	100	—	—	100

の結果をみると、この2種が互いに避けあっている様子はみられない。

垂直分布

垂直分布については、森林にはほとんど生息しないので、農耕地・林、農耕地、住宅地だけについてみる。出現率は標高200m以下では72%、標高201~400mでは68%、標高401~600mでは54%で、標高が高くなるにしたがって低くなる傾向が見られた。これは、平野部に農耕地や住宅地が多く、平野部から山間部になるにしたがって森林が増えるという環境の変化に関係しているからであろう。ニュウナイスズメでは標高201~400mでも出現率は標高200m以下と変わらず、垂直分布から見てもやはり森林に依存するこの種の特徴を示している。

まとめ

以上に述べたことをまとめると、広い範囲の地理的な分布で見た場合には、スズメとニュウナイスズメ2種の重複は大きいですが、生息している環境にはかなりの違いがある。この違いは互いに避けあっているということではなく、それぞれの種が好む環境が異なっているためであろう。

〒080-8555 帯広市稲田町西2-11

帯広畜産大学野生動物管理学教室



図1. 北海道における繁殖期のスズメの分布

一つの区画は、約10km四方で、1/25,000地形図に相当する。

●=生息が確認された。○=調査したが観察されなかった。・=未調査の区画。

南西オーストラリアのパスへの旅

木村与吉

南半球の日本の真南に当たるオーストラリアは、日本の24倍もある大陸である。パスは、大陸の南西部インド洋側に在り世界で最も美しい街、そして自然と文明が融合した理想郷と言われている。

面積253万平方kmと大陸の3分の1を占めるオーストラリア最大の州、西オーストラリアの州都で、日本の7倍もの面積にわずか181万人ほど、しかもそのうち約133万人がこのパスに集中している。内陸部は半砂漠地帯となっていて、穀物や野菜などの栽培は無理のようで、開発がされていなく、豊かな自然が多い。

その中で、西海岸のパス周辺は、地中海性の温暖な気候で過ごしやすいところ。四季は日本と逆で、春は9月～11月、夏は12月～2月、そして秋、冬となる。私たちは春の終りの11月下旬に行ったが、気候は北海道の初夏と同じくらいで、風が吹くと寒いほどだった。

今回訪れたところは、ジョンフォレスト国立公園、ロットネスト島、モンガー湖、キングス公園など8地点である。短期間であったが、楽しいメンバーと共に、天候にも恵まれ、観察できた野鳥は89種と多く、そして珍しい鳥に出会い、感動した旅だった。

ジョンフォレスト国立公園

パスから26km東に位置する自然の森林のある国立公園である。野鳥は、奇麗なインコ類を初め19種類が見られた。樹木の種類は、ユーカリ類が一番多く、ついでアカシヤ類、その他ここ特有のグラストゥリーの仲間など数が多い。またユーカリと言ってもこの仲間は、オーストラリアには5～600種、西オーストラリアにも350種あるそうで判別は難しい。バスの中から時々見られた藤青色の花を一杯に付けた美しい樹冠の「ジャカラング」という木。風土にマッチした樹木であるが、これが南米産の移入種と聞いて驚いた。

ロットネスト島

パスの中心を流れるスワン川の河口にあるフリーマントルから19km、フェリーで30分ほどのインド洋に浮かぶ島である。

フェリー乗り場の港町フリーマントルは、海の歴史と文化遺産のある観光地となっていて、この地名は、1829年5月、英国領と宣言した若干29歳のチャレンジャー号の船長「チャールズ・ホウ・フリーマントル」に由来するそうだ。フェリーでカツオドリやイルカなどが見られるかと期待して船尾の展望席に乗船したが、波しぶきにかかっただけで残念ながら期待外れ。

やがて島に着き、元刑務所を改造したホテルにチェック

インする。この島は、17世紀にオランダ人の探検家によってrotte-nest（オランダ語で「ネズミの巣」の意味）と名付けられた。この島に生息する有袋類の「クオッカ」を大型のネズミと誤解したためとか。

島の歴史は植民地化に始まり、アボリジリ流刑集落、塩の精製所、第二次大戦の軍事基地と、時代の変化に利用されてきたそうだが、現在は、素晴らしいビーチや湾が多く、スキューバダイビング、サーフィン、遊泳などや、釣り場として国内外に人気のある観光地となっている。湖や沼が数か所あって、シギ類の観察された水際には、風で波の花が見られ驚いた。またピンクレイクに行ったメンバーは珍しい「アカビタイサンショクヒタキ」を撮影できて凄く感激していた。ここでは34種が観察できた。なお「クオッカ」は、ホテルの庭や付近の林にたくさん見られた。

キングスパーク

街の近くにある公園で、展望所からスワン川、パスの市内を見渡すパノラマは素晴らしい。園内には車道、サイクリングや自然遊歩道も整備され、市民の憩いの場となっている。

総面積400ヘクタールと凄く広大であり、公園の大部分は原生林に覆われている。資料によると、250種の野生の植物を始め、野鳥、哺乳類、爬虫類、蜘蛛、昆虫など100種類ものオーストラリア原産の動物も生息していると言う。札幌近郊の野幌森林公園に匹敵する自然の残されている公園であろう。私たちもわずか3時間ほどで、ワライカワセミを始め37種も確認し、今回の旅行では一番多かった。

ワライカワセミは、オーストラリアではごく普通に見られる鳥だが、私たちにとっては海外でなければ見られない。カワセミと言うと、色彩が奇麗で小魚を食するものと思っていたが、このカワセミは昆虫や爬虫類を食べ、森林地帯に生息している。今回は、ジョンフォレスト国立公園、キ



アカエリシロチドリと波の花 佐伯武美氏撮影

ングス公園、チャーチマン・ブルック・ダムでじっくり観察できた。体長が約46cmもあり、カワセミ類中で最大である。体色も白と焦げ茶色で目立たなく、意地悪爺さんのような顔をして美しいとは思えないが、愛嬌があって面白い。

チャーチマン・ブルック・ダム

森林地帯では、動かなければ鳥に出会えない。歩き疲れて休んでいると、50mほど離れた所で4～5人が木の中間の枝に何かを見つけた。「オーストラリアガマグチヨタカ」と言う鳥だった。行って見ると3mほど上の木の枝に3羽いた。親と幼鳥2羽とのこと。木の葉が邪魔して見にくいのが、相手が動かないのでゆっくり観察できた。図鑑によるとヨタカ類は5科100種いるそうだが、日本には夏鳥として1種だけ。夜行性の鳥だから昼間はなかなか見られない。もちろん私には初めて見る鳥だった。茶色っぽい姿の木肌と見分け難い保護色である。このように昼間は、安全な木陰に身を潜めて、姿、形も動きが鈍そうに見えるが、夜飛んでいる虫を捕食する行動はツバメに劣らないほど素早いそうである。

この他、モンガー湖などでは、カンムリカイツブリのつがいの優雅な行動を間近く観察できたり、コクチョウ、バ



ワライカワセミ 猪口卓氏撮影

ン類やカモ類の可愛らしい雛を連れた親子のいろいろな行動に時間を忘れて見入っていた。この時期はオーストラリアの春の終りで、鳥たちの子育てが季節でもあり、いろいろな印象に残る楽しい旅行だった。

なお、別表の観察された野鳥のリストは、佐々木さんの資料から作成し、写真は、猪口さん、佐伯さんから提供を受けました。

〒066-0029 千歳市稲穂3-14-9

観察された野鳥のリスト (2001年11月22日～25日)

1	コウライキジ	31	セイケイ	61	オーストラリアガマグチヨタカ
2	インドクジャク	32	オオバン	62	オーストラリアツバメ
3	シラガカイツブリ	33	ムナオビトサカゲリ	63	セジロツバメ
4	ノドグロカイツブリ	34	アカエリシロチドリ	64	キビタイツバメ
5	カンムリカイツブリ	35	トウネン	65	サンショクヒタキ
6	ヘビウ	36	ミユビシギ	66	アカビタイサンショクヒタキ
7	マミジロムナグロウ	37	キョウジョシギ	67	クロズキンヒタキ
8	ミナミクロヒメウ	38	イソシギ	68	シロハラヒタキ
9	シロハラコビトウ	39	セイタカシギ	69	キバラモズヒタキ
10	コシグロペリカン	40	ムネアカセイタカシギ	70	ハイイロモズツグミ
11	コサギ	41	アカガシラソリハシセイタカシギ	71	ハイイロオウギヒタキ
12	ダイサギ	42	オーストラリアミヤコドリ	72	ヨコフリオウギヒタキ
13	カオジロサギ	43	ギンカモメ	73	オーストラリアヨシキリ
14	ハシブトゴイ	44	オニアジサシ	74	ムラサキオーストラリアムシクイ
15	キバシヘラサギ	45	オオアジサシ	75	ウスアオオーストラリアムシクイ
16	ムギワラトキ	46	ヒメアジサシ	76	コモントゲハシムシクイ
17	アカアシクロトキ	47	ニジハバト	77	カオジロオーストラリアヒタキ
18	コクチョウ	48	ワライバト	78	アカミミダレミツスイ
19	クビワアカツクシガモ	49	カノコバト	79	メジロキバネミツスイ
20	オーストラリアメジロガモ	50	モモイロインコ	80	ウタイミツスイ
21	アメリカオシ	51	アカオクロオウム	81	ホオジロキバネミツスイ
22	マガモ	52	オジロクロオウム	82	ニシキリハシミツスイ
23	マミジロカルガモ	53	ゴシキセイガイインコ	83	サメイロミツスイ
24	オーストラリアオタテガモ	54	ムラサキガシラジャコウインコ	84	ハイムネメジロ
25	ニオイガモ	55	マキエゴシキインコ	85	ツチドリ
26	ウスユキチュウヒ	56	ユーカリインコ	86	ハイイロモズガラス
27	フエフキトビ	57	ヨコジマテリカッコウ	87	ハイイロフェガラス
28	シロハラウミワシ	58	ワライカワセミ	88	カササギフェガラス
29	オーストラリアチョウゲンボウ	59	ヒジリショウビン	89	ミナミワタリガラス
30	ネッタiban	60	ハチクイ		

平成14年新年講演会

大館和広さんのコムケ湖シギ・チドリの講演から

広 報 部

平成14年の新年講演会は、紋別市在住で、コムケ湖のシギ・チドリを20年もの長きに渡って調査してきている大館和広さんのお話でした。「コムケ湖といえば大館さん」といわれるほど、北海道のみならず全国的に名の知れた大館さんの講演とあって、定員100名の会場は満員となり、たいへんな盛況でした。

初めは大館さんが用意してくれた資料とOHPを用いて、1986年から2001年まで、年毎にコムケ湖で記録されたシギ・チドリの種類数と個体数の紹介でした。ほぼ毎年、種類数としては30種以上、個体数は大館さんが忙しい仕事の合間をぬって数えたものだけで、千の単位に及びます。中でも多いのはトウネンとハマシギで、全体の9割ほどを占めているとのことでした。

春は5月になるとそろそろ見られ始め、中旬過ぎから増えてきて、下旬にピークがありますが、6月に入ると少なくなってしまうようです。たくさん見られるのは5月15日過ぎから5月いっぱいまでと、ほぼ半月の間です。一方、秋は7月下旬から11月下旬近くまでの、ほぼ4ヶ月に渡っており、春と秋とでは見られる期間に随分と違いがあることを改めて認識させられました。また、秋の渡りの時期、トウネンは比較的早く来て8月下旬にピークをむかえ、10月中旬ぐらいにはいなくなってくるのに対し、ハマシギは遅く来て、10月になって急に増え、10月下旬にピーク、そして11月下旬まで見られるとのことでした。同じ渡り鳥でも、ほぼ2ヶ月ほど渡りがずれていることに大きな興味を持たれました。

トウネンとハマシギの他に、メダイチドリとダイゼンについて、また、オグロシギ、オオソリハシギ、アオアシシギの3種について1986年からの毎年の観察数(1回の観察の最高数)を比較するグラフを見せていただきましたが、年毎に随分と違いあるようでした。もっとも、これは大館さん自身が言われておりましたように、仕事の合間をぬっての限られた時間での観察ですから、ある程度のばらつきはやむを得ないかもしれません。正確なものを求めるには、毎日毎日、朝から晩までコムケ湖にへばりついていなければならないでしょう。

大館さんの資料のうちから、1985年から2000年までにコムケ湖で記録されたシギ・チ

ドリの秋期の年毎の出現記録の表を掲載させていただくお許しを得ました(次ページ参照)。

表には44種類があげられていますが、1984年以前にオオメダイチドリが記録されているとのことで、これまでに大館さんによって記録されたのは45種類になります。そのうちの約7割が、毎年あるいはほぼ毎年記録されています。種類数から見ても、また個体数から見ても、コムケ湖は北海道でもっとも多くシギ・チドリが観察される場所の一つであることには間違いありません。

続いて、シギ・チドリのフラッグ標識の話になりました。大館さんは標識調査者でもあります。シギ・チドリを捕獲し、右足には「すね」と「ふしょ」(すねの下の部分)にそれぞれ青いフラッグを、左足には「すね」にメタルリングをつけて再び放します。日本および世界の各地で同様のことが行われていますが、右足に2つの青いフラッグをつけるのはコムケ湖だけです。そのような鳥が他の地で目撃されたとき、その鳥はコムケ湖に立ち寄ったものであることがわかるわけです。大館さんの資料には、コムケ湖で標識された鳥が、ほぼ日本全国の海岸線で観察されていることが示されていました。大館さん自身が大きな興味を持たれていたのは、石狩湾の海岸でも観察されたことでした。オホーツク海岸を北上し、宗谷岬をグルッと回って石狩湾に来ることは考えにくく、内陸部を横断してきた可能性が強いということでした。実際にそうだとしたら、北海道の真ん中を人知れず横切っているわけで、シギ・チドリ



講演会風景

の「山越え」となります。そんな光景を目撃できたら、何とすばらしいことではありませんか。

以上のようなお話の後、コムケ湖のシギ・チドリの美しい姿が、60枚のスライドで紹介されました。1枚1枚のスライドごとに、参加者から感嘆の声があり、真っ赤なサンゴソウとの組み合わせには、ひととき大きな歓声があがりました。

会場使用の時間的制限から、急ぎ気味の講演となり、大館さんにとっても、また参加者にとっても、もっとじっくりという気持ちが残りました。でも、その気持は実際にコムケ湖に行って取り戻そうという形で講演会を終了しました。新年早々の忙しいところを、また、足代にもならないほどの文字通りの「薄謝」にも拘わらず、わざわざ紋別市から来て下さった大館さんに、心より感謝致します。

コムケ湖のシギ・チドリ 1985年—2000年 秋期

種名	年																
	出現種数	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00
ミヤコドリ	○	○			○				○					○			
ハジロコチドリ				○		○	○	○								○	
コチドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シロチドリ	○	○		○												○	
メダイチドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ムナグロ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ダイゼン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
タゲリ																	○
キョウジョシギ	○		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
トウネン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒバリシギ	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オジロトウネン				○				○		○	○		○	○	○	○	○
ヒメウズラシギ				○													
アメリカウズラシギ	○			○	○	○		○				○	○			○	
ウズラシギ	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハマシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
サルハマシギ	○	○		○	○	○	○	○						○		○	
コオバシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オバシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ミュビシギ				○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヘラシギ	○	○	○	○	○			○		○	○			○	○		
エリマキシギ	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コモンシギ				○					○								
キリアオ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オオハシシギ						○	○	○							○		
ツルシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アカアシシギ			○														
コアオアシシギ			○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○		
アオアシシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カラフトアオアシシギ												○					
クサシギ														○		○	○
タカブシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キアシシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イソシギ	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ソリハシシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オグロシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オオソリハシシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
チュウシャクシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホウロクシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
タシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
チュウジシギ												○			○		
オオジシギ		○				○		○		○		○	○	○	○	○	○
セイタカシギ			○														
アカエリヒレアシシギ	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○		○	○	○

小さなコアジサシ

岸谷 美恵子

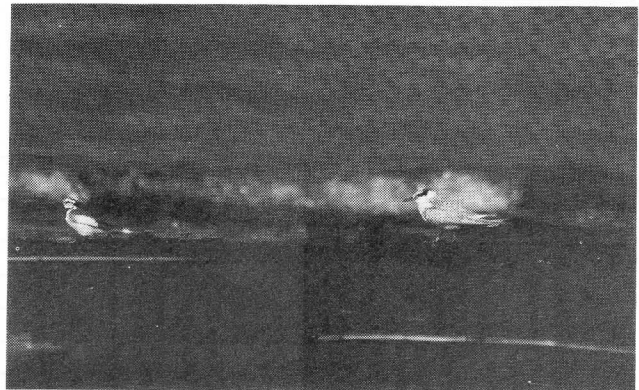
2001年9月30日、天気は良かったが、風はとても強かった。他の場所でアカアシアジサシを見てから、午前11時頃、この場所に来た。石狩灯台の対岸、船着き場より少し河口寄りにある小さな干潟です。ここは多種類のシギ・チドリが見られる場所なので、8月中頃から通いつめていました。(9月になって、17日にはキリアイ、18日からはオグロシギ、21日からはホウロクシギ、そして30日からはコオバシギが見られました。)

この日は、最初は何もいなくて寂しかったのですが、突然真っ白に見える小さな鳥が干潟に舞い降りました。砂地にへばりついているかのように見えたのでアジサシ類かと思ったが、小さい。望遠鏡で見ていると、ハクセキレイがちょっかいを出してきた。いやがって飛び上がり移動する。ハクセキレイより少し大きいくらいだ。背や翼に茶褐色のV字斑がきれいにあった。図鑑で捜して、コアジサシの幼鳥と解った。足も嘴の基部もオレンジ色だった。この間2度飛び立たれたが待ち続け、やっと証拠写真が撮れました。

〒063-0823 札幌市西区発寒3条1丁目1-5

[編集部注]

本州方面では埋立地や川原などの砂地や礫地にコロニーをつくって集団繁殖をすることで知られているコアジサシですが、北海道では珍しい鳥の一つです。愛護会会員の林吉彦さん(日本野鳥の会道南檜山支部長、日本野鳥の会理事)の話によりますと、厚沢部川河口(檜山管内江差町)では例年9月頃に十数羽から数十羽の群れが見られるようですが、他地域では海岸線などで希に見られる程度です。石狩の海岸線近くでの確実な記録は、これがおそらく初めてと思われる。



コアジサシ(右)とハクセキレイ(左)



飛翔中のコアジサシ

日本には夏鳥として渡来し、本州以南で繁殖します。越冬地は日本より南方ですから、北海道は通常の渡りのコースには入りません。その年生まれの幼鳥が何かの加減で石狩にまで来てしまったものと考えられます。

なお、岸谷さんの文中のアカアシアジサシは亜種名です。日本に渡来するアジサシには、嘴が黒で、足が黒褐色の亜種アジサシと、嘴は赤くて先が黒、足は赤い亜種アカアシアジサシの2亜種があります。



快晴のウトナイ湖・
はじめて探鳥会に参加して

2001.11.11

大荒田 忠 良

フクロウにもクマガラにも出会えた……利根別の森ではじめて鳥たちに会い、一人図鑑を頼りに親しんで2年余、時には水辺の鳥たちにも会いたいと思うようになってきました。近間に宮島沼がある。ウトナイ湖もあるぞ。そん

なことで、つい最近、がんばってフィールドスコープを購入しました。

まずは近くの宮島沼へと出かけてみました。事前に図鑑で鳥たちの特徴をしらべ、期待に胸はずませながらスコープをのぞいてみました。ところがさっぱりわかりません。鳥たちは波間にゆれ動き、水にもぐり、なかなか図鑑どおりに特徴を明かしてくれません。やはり何回も出かけ、スコープの扱いや鳥たちの姿に見慣れることが必要であると自覚しました。

できるだけ水辺の鳥たちを訪ねる機会をつくろうと思っていた、丁度そんなとき、佐藤幸典さんからウトナイ湖探

鳥会のお誘いをうけ、よろこんで参加させていただきました。

岸辺にはオオハクチョウ、コブハクチョウ、オナガガモが群れ、ヒドリガモもすこし混じていました。湖のなかほどにはマガモがたくさん泳いでいました。自分で確認できた鳥たちはこんなところでした。あとはさっぱりわかりません。

でも佐藤さんからカワアイサ、ハシビロガモ、ヨシガモなど、次々とスコopで鳥たちを紹介していただいたり、会員の皆さんのハクガンがいる、アオサギが飛んできた等々の声をききながら、とても楽しく沢山のことを教えていただきました。特に湖面から一斉に鳥たちが飛びたつたときには何事かと思いましたが、オジロワシだ！という声にやっとその理由がわかりました。

この時季としては心地よいほどの天気にも恵まれ、また、ツルウメドキが黄赤色の美しい実をつけ、立枯のエゾリンドウが風にゆらぎ、マヒワの群れが飛び交う秋のウトナイ湖岸の景観が感動的でした。

そしてこの日、私もまたの日の探鳥会を楽しみに皆さんの仲間入りさせていただくことになりました。どうぞ宜しくお願いが致します。

〒068-0803 岩見沢市南町3条2丁目2-12

【記録された鳥】 カイツブリ、ミミカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウビ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ハクガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミネコ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、マヒワ、スズメ、ハシブトガラス

以上 33種

【参加者】 藤原和子、内田 孝、山田良造、小西美美枝、内田正裕、板田孝弘、山口和夫、三上雄幸、村上トヨ、佐藤幸典、松原寛直・敏子、島田芳郎・陽子、高栗 勇、渡部美枝子、高橋良直、岡田幹夫、栗林宏三、岩崎孝博、瀬賀勝人、赤沼礼子、蒲澤鉄太郎、成澤里美、川村宣子、今村三枝子、藤原伸彦、後藤義民、石田典也、大橋弘一、今泉秀吉、大荒田忠良、勝俣征也、小山久一、小堀煌治、井上公雄

以上 36名

【担当幹事】 蒲澤鉄太郎、岡田幹夫

森が語りかけるもの

2001.12.2 大畑 靖子

「市街地に凜と佇み原始林、大木見上げる人の小さき」
普段は、歌心など微塵も持ち合わせてはいないが、自然の前に佇むと、誰もが詩人になれるのだろうか。

春夏秋冬・この四季の織り成す自然の営みは、人に何を

呼び掛け、何を語りかけるのだろうか？

鳥の声、水のせせらぎ、葉のざわめき。

森の中を歩いていると、その全てに、何かが解き放たれていく。

花や鳥、小動物との出会いの歓喜。

鳥は囁き、花は可憐に微笑みかけてくる。“アナタノオナマエハ？”心の中でそっと話しかけてみる。

森は、泰然自若にしてその懐に、やさしく全てを包み込んでくれる。そう、優しい。森はいつも優しい。その優しさに抱かれて歩きながら、森の一員と化した時、陽は差しかける。

生きることは歩むこと。自然の恩恵に感謝し、原点に立ち返る勇気をも指し示してくれる。

— 自ら背負い込んだ荷を、ひとつひとつ降ろそう —

早朝ウォーキングを始めて、気がつけば10数年の月日が経っている。

夜の明けきれぬ、日の出前の森は、中に立ち入ることさえ許さない頑固さで、ウォーキング当初の目的地は、この森の入口までであった。

ある日、いつもの時間より遅く森に着くと、すでに陽は昇りかけていた。

「朝は抱き森は中へと吸い込みて、癒しのメロディー奏でてくれる」文字どうり、吸い込まれるように迎え入れられたその日から、ひたすらに、只ひたすらに、森の中を歩き続けている。

森が語りかけるもの。それは自己の省察を呼びかける、内なる生の声なのかも知れない。自然から学び己と対座せよと。それはまた、先人が残してくれた道標。ただ生きるだけではなく、よりよい生き方を吟味せよと。ソクラテスに続き、学ばば禄その中に在り。と孔子が諭す。

「三千年を解くすべをもたない者は、闇の中、未熟なままに、その日その日を生きる」ゲーテ

朝のウォーキングを終えると、今日という一日が始まる。その積み重ねの中、内なる声に耳を傾け、明日もまた、ひたすらに、ただひたすらに歩き続けよう。

〒069-0854 江別市大麻中町26-18-1012

【記録された鳥】 トビ、ハイタカ、ノスリ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、カケス、ハシブトガラス

以上 18種

【参加者】 安念瑛子、渡辺好子、愛澤文祥、平居美代子、西根昭吉・紀子、大橋弘一、小堀煌治、松原寛直・敏子、山田厚子、川東保憲、小西美美枝、岡田幹夫、齊藤正雄、島田芳郎・陽子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、石田典也、長尾由美子、高橋良直、大畑靖子、河端正晴、村上トヨ、山本昌子、横山加奈子、今村三枝子、橋本翠柚、

勝俣征也、富田寿一、田宮ひろ子、吉田慶子、山川美香、
木村朗子、佐々木 裕、井上公雄 以上 39名

【担当幹事】戸津高保、富田寿一

小樽港の探鳥会に参加して

2002. 1.20 和 賀 律 子

夏場はドライブやゴルフで心身をリフレッシュしていた夫ですが、冬になると仕事のストレスをなかなか解消できずにいました。

何か二人で出来る事は無いかしらと思っていた時、新聞の片隅に『探鳥会に参加しませんか』と言う記事が載りました。

私「ネー鳥を見に行かない？」

夫「トリって？」

私「探鳥会に参加して海鳥を見にいきたいのよ。」

夫「トリと聞くと鳥肌が立つんだ。」

更に夫「インフルエンザは渡り鳥が運んでくるんだぜ。」
不謹慎な夫の言葉である。

アレルギー体質の夫は羽毛の付いた動物はことごとく嫌なのだ。「遠くで見るだけだから行きましょうよ。」友人たちは、「あなたの愛が強ければ一緒に行くことが出来ると思うけれど、どうかしら？」などと言ったが、当日外国旅行用の小さな双眼鏡を持って気後れしながらも二人で参加した。

それまでの私は、ウミガラスを見るのは天売島、オジロワシはオホーツク、シノリガモ、ホオジロガモなどは図鑑で見ると思っていました。しかし其処で、目から鱗の落ちるような光景を見ました。本でしか見たことの無い鳥たちが泳いでいるではありませんか！

小樽港は我が家から車で十分程。こんなに近くに、私が気付かなかったずっと前のその又前から毎年飛来していたのですね。並んでスイスイ、浮かんでスイスイ、羽を開いたり滑空したりおまけにディスプレイ、いくら見ても飽くことが無い、鳥ってこんなにも心を癒してくれるのですね。

会員の方の一人が「この子達は、遠くシベリアの方から渡ってくるのよ。」「あの子はね、夏には山奥の湖沼で暮らすのよ。」野鳥に慈しみを持って接しているのだと思いました。鳥は子供と同じ、自分の力で周りの環境を変えることが出来ない本当に弱い動物、その意味でこの子達という言葉がピッタリだと思いました。

今年は何故か鳥の数が少ないそうです。年々悪化の一途を辿る自然環境、現に此処の港の一部は冬の間雪捨て場と化して薄黒い雪が海面を覆っていました。そんな事を思いながら見ている視界の中に夫が写りました。何と彼は、会員の方の助けによって三脚付き双眼鏡から眺めてご満悦の

様子、其の夜の会話は鳥の話に花が咲いたことは言うまでもありません。

一週間後の日曜日私達は海鳥を見に又同じコースを回りました。明らかに前回より鳥の数が増えていました。その中にたった1羽ツッパリ兄ちゃんの頭のような冠羽をした、ウミアイサを見つけました。もう二人ともフリーズして見とれてしまいました。ウミアイサは探鳥会の時一羽しかいなかった鳥です。

翌日が低気圧の影響で日本海は大シケ、こんな日、海鳥は如何にしているかしら？とても気になり吹雪の中、港まで行ってみました。そこに避難している船で一杯でした。

その中に鳥のために空けてあるかの様に思える所がありました。健気にもそこでホオジロガモがおおよそ百羽スイスイ泳ぎ回っていたのです。ホッとすると同時に愛おしさまで感じて帰宅しました。

私たちのどちらの愛が強かったのかは、定かではありませんが、今、私たちは小樽港に友人を案内することを約束し、本やインターネットのホームページを見たりして鳥の虜になっています。

そして来年もまた、この子達がたくさんの仲間を連れて、飛来して私たちの心を癒してくれることを願って居ます。

〒047-0024 小樽市花園1-7-11



小樽探鳥会風景

【記録された鳥】アカエリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、オジロワシ、オオワシ、マガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ハクセキレイ、ツグミ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 24種

【参加者】汐海喜代恵、小須田秀子、戸津高保・以知子、井川修二、伊藤聖子、伊藤恭子、栗林宏三、蒲澤鉄太郎、富永、樋口孝城・陽子、雪田昭治・久子、島田芳郎・陽子、塩崎洋一・和子、和賀 豊・律子、山口和夫、小西美美枝、志田博明・政子、中正憲信・弘子、木村与吉、岡田幹夫、佐藤幸典、武沢和義、成澤里美、松本美智子、田宮ひろ子、

清水朋子、山本昌子、大荒田忠良、荒木良一、岸谷美恵子、板田孝弘、長尾由美子、岩崎孝博、横山加奈子、小西京子、山形裕規、広木朋子、五十嵐美保、高橋良直、亀井厚子、村上トヨ、高栗 勇、柳川 巖、梅木賢俊、白澤昌彦、井上公雄 以上 54名

【担当幹事】梅木賢俊、白澤昌彦、栗林宏三

野幌森林公園の探鳥会に参加して

2002. 2. 3 富士木 貴美江

此度はお友達が誘って下さり飛び入りではじめて参加させて頂きました。真青な空と真白な雪がまぶしい素晴らしいお天気に恵れどんな小鳥達と逢えるのかと楽しみに森の中へ進んで行きました。野鳥といえばカラス、スズメぐらいしか判らない私ですが、ご一緒された心優しき方々に双眼鏡の使いかた、シナの木の実は堅くて鳥は食べられないことや色々教えていただきました。

エナガという小鳥を多く見かけたように思いますが、とても小さくそして上品な鳥のようにみえました。そろそろコースの終点という所でカケスを覗いていましたら、すぐ傍にチョロチョロと可愛いエゾリスが姿を見せてくれ感激しました。何度もここへ来られている方は数年前からみると野鳥の数が減ってきていると、淋しくおっしゃってましたね。これだけの自然を残して下さった北海道先人の方々のためにもこれからも大切に守っていかなくてはいけないのではと感じました。

北海道のさわやかな空気を沢山吸って、さいたま市へ戻りましたが、又ぜひ、おじゃまさせて頂きたいと思っています。皆様ありがとうございました。

〒330-0034 さいたま市土呂町1丁目3-10

ユーエスハイム303

【記録された鳥】トビ、コゲラ、オオアカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、カケス、ハシブトガラス 以上 16種

【参加者】横山加奈子、大野俊夫、赤沼礼子、今村三枝子、道場 優・信子、栗林宏三、松原寛直・敏子、鈴木哲子、富士木貴美江、国田ヨシ子、太田瑞穂、島田芳郎・陽子、品川睦生、山田博之、梶原紀一、山田民雄、山本昌子、五十嵐幸子・洋輔・かおり、吉田慶子、中山裕子、岡田幹夫、佐藤満時・涼子、岸谷美恵子、半田孝俊、高橋成人、大畑靖子、矢野英雄、岩崎孝博、村田静穂、高橋良直、山田良造、大槻日出、佐々木泰夫、菅原スエ子、橋爪陽子、丸山知司・美知子、西根昭吉・紀子、斉藤正雄、戸津高保、長尾由美子、後藤義民、田中吉郎、沢田浩一、井上公雄、白澤昌彦・留美子、松岡捷也・祥子 以上 56名

【担当幹事】後藤義民、村田静穂

鳥民だより

◆総会のご案内

平成14年度の総会を次のとおり開催いたします。愛護会の活動方針を決定する、年に一度の重要な行事です。会員の皆様が多数ご参加されることを希望します。

日 時：平成14年4月13日(土)午後2時から

場 所：札幌市民会館 1号会議室

議 題：平成13年度事業報告 同会計報告

平成14年度事業計画 同予算案 ほか

◆野鳥写真展の開催と写真募集

日 時：平成14年5月8日(水)～5月20日(月)

場 所：光映堂ギャラリー2階「ウエストフォー」

札幌市中央区大通西4丁目 ☎011-261-0101

展示作業は5月7日午後5時30分から、搬出は5月20日午後5時30分から行います。出展ご希望のかたは写真を用意のうえ、ご参加ください。なお、昨年同様、デジタルカメラによるプリントも参加可能です。スチール写真は4ツ切り、デジカメ写真はA4サイズをお願いいたします。

写真の送付先は光映堂の小林さんまで(住所は上記)。

問い合わせは小堀さんへ。 ☎011-591-2836

(午後8時～10時 時間厳守してください)

◆コムケ湖一泊探鳥会のご案内(予告)

平成14年度の一泊探鳥会は、7月31日～8月1日に、コムケ湖の予定です。詳しいご案内は次号(第128号)に掲載いたします。

◆30周年記念誌販売のお知らせ

「私たちの探鳥会 探鳥会30年の記録」は、まだ若干の余部があります。会員の皆様には特別価格でお届けいたします。ご希望のかたは蒲澤さんへ。 ☎011-663-9783

◆平成14年度会費納入のお願い

振替用紙を同封しました。どうぞお忘れなく会費を納入してください。前年度までの未納入分がありましたら、合わせてお願いいたします。

【新しく会員になられた方】

山田 雅仁 〒065-0015

札幌市東区北15条東4丁目10-2

金井 陽一 〒064-0951

札幌市中央区宮の森1条16丁目1-8

村木 明雄 〒007-6839

札幌市東区北39条東14丁目4-31

澤田 富子 〒064-0922

札幌市中央区南22条西8丁目1-18

中島 慶子 〒065-1032

札幌市東区北32条東2丁目1-14-504

中川 匡史 〒002-0858

札幌市北区屯田8条12丁目8-1



☆探鳥会は、探鳥幹事を中心に行います。

野幌森林公園を歩きましょうの場合は、集まった方の中からリーダーを立てて行います。

☆余程の悪天候でない限り行います。

☆公共交通機関を利用される方は各自でお確かめください。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。

☆探鳥会の問い合わせ

自然保護協会事務所 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日・祭日を除く)

4月7日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 残雪の中、めっきり春らしくなった森を歩きます。カラ類が盛んにさえずっています。	
4月14日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 そろそろ夏鳥到来です。さえずりが板に付いていないのもいて、ちょっぴり笑わせてくれます。	
4月21日(日)	宮島沼	大富会館 午前10時集合
	中央バス(月形行) JR岩見沢駅前バスターミナル発 大富農協前下車 徒歩10分 北帰の途中、マガンたちが宮島沼に集結します。ほどよい雪解けに期待したいところ。	
5月3日(祝・金)	藤の沢	白鳥園 午前9時集合
	定鉄バス(定山溪線) 藤野3条2丁目下車 徒歩15分 私の探鳥地【十五島公園】にも白鳥園の裏の川が登場します。裏山を散策しながらの探鳥です。	
5月5日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 新緑がさわやか。ミズバショウが盛りです。オオルリ・キビタキのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月12日(日)	千歳川周辺早朝探鳥会	孵化場手前の橋付近 河川敷小公園 午前5時スタート
	(早朝のため公共交通機関はありません) 朝食のご用意を忘れずに。防寒装備は十分に。 川沿いの道は自然の宝庫。水辺の鳥も林の鳥も・・・。運がよければヤマセミに会えるかも。	
5月19日(日)	鶴川	JR日高本線 鶴川駅前 午前9時30分集合
	道南バス 鶴川農協前下車 徒歩5分 シギは来てるかな? チドリは? ハヤブサは? 牧場でさえずる鳥たちも楽しみです。	
5月26日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 遅まきながらメボソムシクイ・コボソムシクイが到着です。やっと夏鳥勢ぞろいとなりました。	
6月2日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線 植苗駅前 午前9時10分集合
	JR千歳線 植苗駅下車 林を抜け、草原の鳥を堪能しながら湖畔へ向かいます。オオジシギのフライトが見事です。	
6月9日(日)	東米里	東米里小学校正門前 午前9時集合
	市バス(米里線) 東米里小学校前下車 草地在り少なくなりました。でも、今年もノビタキ・カッコウ・モズたちに会えるでしょう。	
6月15日(土)	平和の滝 夜の探鳥会	平和の滝駐車場 午後6時30分集合
	市バス(西野平和線) 平和の滝入口下車 徒歩20分 遠くから聞こえるコノハズク・ヨタカの声が減ってきました。懐中電灯の用意をお忘れなく。	
6月23日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 子育てに大忙しの頃。木の葉の影にエサをくわえた親鳥がいるかも。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>